

儀礼と結びつき、現在のような豆で鬼を追う形式に変化した。文武天皇の慶雲3年（706）にはすでに行われていたという宮中の追難^{えさき}は、方相氏が発する声と群臣の弓などで難（疫鬼の意味）を追ひ払うものであった。平安時代末期になると方相氏の仮面や装束が異様であることから、鬼と取り違えられるようになった。節分に豆をまく行事は、京都では室町時代に始まり、「鬼は外」の唱え事も既に行われていた。

節分詣り発祥の社とされる左京区の吉田神社で行われる節分祭^{かねみ}は、最も有名な節分行事の一つであり、吉田兼見により記された「兼見卿記^{きょうき}」の元龜3年（1572）の記事の中に、記載を見ることができる。室町時代に始まったとされる疫神祭、追難式^{かろさい}、火炉祭などの祭事は、現在も古式にのっとり執行され、期間中50万人を超える参拝客で賑わう。

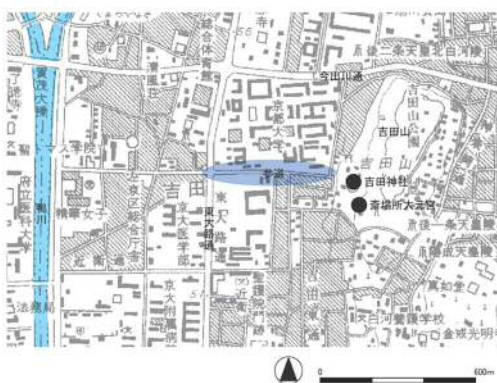


図2-11 節分祭の例（吉田神社）

旧暦の節分に鰯と柊を門口に指し、年男が厄を避け、福よ来いと炒った豆を蒔く風習は江戸初期には一般の家で行われていることが文献に記載されているが、鬼の姿をした鬼を追ひ払う風習は明治以降であると推測される。

吉田神社は、貞観元年（859年）、藤原山蔭が春日の四神を勧請し、平安京の鎮守神にしたのが起こりで、重要文化財の斎場所太元宮をはじめ、境内には、多くの摂社、末社がある。

2日に執り行われる追難式^{ほうそう}では、主役の方相氏^{しんし}、赤・青・黄の三鬼^{しょうけい}、仮士の子供、上卿などが参道を下り始め、やがて方相氏と鬼が戦い、次第に鬼の力が弱くなり、最後に上卿が桃の弓で葦の矢を射って鬼は追ひ払われる。大変に迫

力のある祭事であり、参拝客の喧騒に交じって、鬼の迫力に恐れた子供の泣き声が聞こえる。3日の火炉祭では、境内に据え付けた巨大な金網式の炉の中にいれた旧年のお札や神矢などを燃やす火柱があがり、夜を通して燃え続ける。その炎は参拝者に無病息災をもたらし、新春の幸運を授けると言われる。

この、節分祭の期間中、参道には800を超える多くの露店が立ち並ぶ。ここで授かった豆は大切に家に持ち帰り、家族と一緒に、年の数を数えて厄除けを祈念して食する。



写真 2-10 節分祭（吉田神社）

提供 吉田神社

(イ) 春（3月～6月）

a やすらい祭

今宮神社等のやすらい祭は、別名「やすらい花」（重要無形民俗文化財）ともいい、地域に根差した民俗行事として、鞍馬の火祭、太秦の

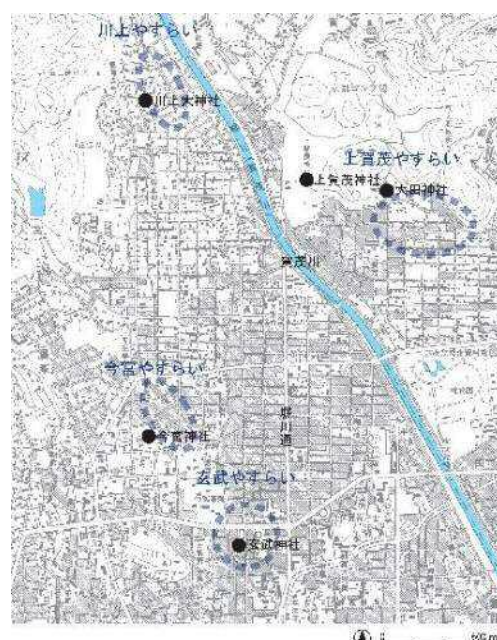


図2-12 やすらい祭